

# Can't Stop Fall in Love 2

キャントストップフォーリンラブ

## 第一話

「イヤっ、あつ……んっ……」

口では嫌と言いなながらも、身体は容赦なく反応する。

ここは、駅から徒歩十五分という場所にある、1DKの私のアパート。

今日は彼氏と仕事帰りのドライブを楽しみ、私のアパートまで送ってもらった。すると彼が、部屋でコーヒーを飲みたいと言ったから招いて……ついさっきまで、それはそれは和やかに、ふたり並んで座っていたのだ。けれど、いつの間にやら妖しいムードが漂い始め……コーヒーのおかわりでもと立ち上がろうとした頃には、時すでに遅し。彼に手首を掴まれ、背にしていたベッドにうつぶせにされた。

背後から回り込んだ手が、カットソーを胸元まで捲る。そうして最近なぜか大きくなったふたつの膨らみを、ブラジャーの上から揉み上げている。

——なにが、どうして、こうなった!?

胸元を這う両手を、力なく押さえながら身を振る。すると妖艶な美男子が、真つ黒い微笑みを浮かべているのが見えた。

私は、羽田野美月、二十三歳。

今年の春に大学を卒業し、株式会社SUZAKI商事にて「今のところ」総務部総務課に勤める社会人一年生。

そして、背後から私にいやらしいことをしているのが、四歳年上でこの会社の専務である須崎輝翔さん。

彼は、その名の通りSUZAKI商事を取り仕切る須崎グループの跡取り息子。いわゆる御曹司というやつだ。

私の父が須崎グループの顧問弁護士をしている縁で、私の家族と輝翔さんには交流があった。中でも私の兄とは学生時代からの親友で、うちによく遊びにきていたのだ。容姿端麗、頭脳明晰、おまけにセレブという輝翔さんのことを、私はずっと、憧れの先輩として慕っていた。

そんな彼とお付き合いするようになったのは、今から三ヶ月ほど前。

私の誕生日のお祝いで輝翔さんが連れて行ってくれた高級ホテルのスイートルームで……物語に出てくる王子様のように、私の足元に跪いて彼は言った。

『ずっと前から君のことが好きだった。俺と、結婚を前提に付き合ってください』

憧れていた先輩が、私に想いを寄せていたなんて……マジですか？

嬉しい反面、私みたいな庶民はお相手として相応しくないと悩んだりもした。けれど私は、輝翔さんと一緒にいるために、少しずつでも成長していこうと決意した。

——が、しかし。

輝翔さんのお母様——須崎グループの代表取締役社長によって、専務付きの秘書に抜擢されてしまった。……少しずつ成長、とか言ってる場合じゃない！異動は来月、年明けからとすでに決まっている。

社会人一年目で、専門知識もない私がなぜ!?

我が社の秘書課というのは、社内トップクラスのエリートが集う女性社員憧れの職場。秘書検定一級を取得した者だけが、選抜試験を受けられる。選抜試験後、厳しい研修をこなしてから配属されるか、各部署で優秀だと評価された人間が異動となる、超狭き門なのだ。

そんなところに、これといった取り柄のない私が配属。しかも須崎グループの将来を担う御曹司の秘書になるだなんて、プレッシャーどころの騒ぎではない。

だからといって、社長の決めたことを覆す力だつてあるはずない。

という憂鬱な気持ちを彼にこぼしたら、食事に誘われ、今に至る。

「な、慰めてくれるんじゃない、なかつたんですか!？」

触れられた場所から、ぞわぞわと快感が湧き上がってくる。それに必死で抗いながら、輝翔さんへの説得を試みた。

そりゃあ、恋人同士ですから、こういうことも致しますよ。でも今日は、そんな気分じゃないんだつてば!

突然の人事異動に落ち込んでいる私を、励ましてくれるんじゃないの？

……なのに、私の服を次々と剥ぎ取る輝翔さんは、やる気満々なんですけど？  
「落ち込む必要はないよ。それに俺は、念願叶って嬉しいんだ。ずっと美月に秘書になってももらいたかったし」

背中に唇を寄せながらささやかれる。吐息がかかり、肌がふるふると震えた。

しかも、私の胸を触っていて両手が塞がっているからって、は……歯で、ブラジャーのホックを外した!?

なんでそんな器用なことができるんだ!

「大丈夫、今月いっぱい準備期間はある。異動後は、もちろん俺もサポートするから心配いらな  
いよ」

今月いっぱいって……もう今は十二月の半ばだし。それに、この状況で心配いらな  
いって言われ  
ても、説得力に欠けるんですけど。

輝翔さんの言う通り、私の秘書としての勤務は年明けからだ。でもそれは、明日からでも異動さ  
せようとする輝翔さんのお母様に対して、年貢の取り立てを待ってもらおう農民の如く懇願したか  
らだ。

だって、秘書課への異動は私にとって寝耳に水、青天の霹靂なわけで。

しかもこれから年末に入り、総務の仕事だって忙しくなるし。各種書類の作成に年末年始休暇に  
向けての諸対策、年賀状の送付など。それに、なんといつても大掃除。一年の汚れを落とし新年を  
迎える準備をしなければならないのだ。

と、いうわけで。私の異動に関する話し合いの場で、彼のお母様に猶予をください、と拝み倒  
した。

けれど、そんな私に対して、お母様は微笑みながらも容赦のない一言を浴びせた。

『総務の仕事は、美月ちゃんじゃなくてもできるじゃない』

ぐ、ぐはあっ！

お母様にバツサリと切り捨てられて頭を抱える。すると、それまで私達のやり取りを黙って聞いて  
いた輝翔さんが口を開いた。

『まあ、社長。これから慌ただしくなりますし、年始の挨拶から同行してもらえば取引先への紹介  
の手間が省けるので僕としても助かります』

輝翔さんって、母親に対しては自分のことを『僕』って言うのね……

なんて感想はさて置き、柔和な表情をしつつも凜とした態度はなんとも頼り甲斐がある。

現場に居合わせた私の父と兄も同調して説得し、異動は年初めからということに落ち着いた。

しかし、四対一でようやく勝てるって、やっぱりお母様はすごかった……

『年末の挨拶も年始の挨拶も変わらないでしょうに。美月ちゃんのための手間を惜しむなんて輝翔  
らしくないんじゃないの?』

最終的に折れたお母様は、顔は笑っていたけど眼光は鋭かった。

でも、輝翔さんも負けていない。

『僕はいつでも美月の味方ですから。それに、大切にしろと言ったのは貴女じゃないですか』

そう言いながら笑っているのに、どうして黒いオーラを発しているのでしょうか……？

腹黒親子は、お互いに腹の探り合いをしているように感じられ、はつきり言って居心地が悪い。

『心配するな、この親子にとってはこれが普通だから。我々が仲裁しようとしても聞く相手じゃない。そのうち慣れる』

諦めた様子で茶を啜る父と兄を見て、私が須崎親子に弱いのは遺伝子レベルで決定しているような気がした。

「そ、そんな風にサポートしてもらったら、秘書の意味がないじゃないですか……!？」

膨らみを弄ぶ手に翻弄されながらも、不安が消えることはない。

だって私は、容姿も家柄も仕事の能力も、すべてが『普通』の人間だから。

それでも、自分を卑下するのは、もうやめにしようと決めた。

須崎グループの御曹司にして、絵に描いたような王子様の輝翔さん。その彼と、これから先も一緒にいるためには、私はもう『自分なんて』と言って逃げているわけにはいかない。

ずっと、手が届かない人だと思っていた。なのに、初めて会った日から、どうしようもなく惹かれた憧れの人。

身分違いの恋だと悩んでも、私にはこの手を離すことなんてできやしない。

すっきり力の抜けた身体を振って輝翔さんの方を向くと、やわらかくてあたたかな唇が落ちてくる。舌と舌を絡ませたら、唾液が溶け合ってくちゅり、と音を立てた。

「……ふ……ん、……う……あ……」

漏れる吐息に甘い声が混ざる。目の前の輝翔さんの首に手を回して、その身体にしがみつく。

これから自分がどんな状況に置かれるのかわからなくても、私はもう、輝翔さんの傍を離れたい。

——私の運命は、輝翔さんと恋に落ちた時点で、大きく動き出していた。

\*\*\*\*\*

「ああつ、輝翔さ、ああ……んっ……」

キスで濡れた唇が俺の名前を呼ぶたびに、胸の奥が締め付けられる。

ほんのりと赤くなった白い肌も、潤んだ瞳も、馬鹿みたいにかわいい。

俺——須崎輝翔は、組み敷いた最愛の恋人を見下ろしながら、その姿をじっくりと目に焼き付けた。

美月は壁が薄いからと嫌がるが、俺はこの部屋が気に入っている。趣味よくレイアウトされた女の子らしい家具に、ふたりで眠るにはちよつと狭いシングルベッド。1DKの部屋は、美月の空気で満たされている。

そのことを、これほどまでに心地よく感じるのは、自分が美月を深く思っているからだろう。

昔は、親友の妹で、子供だと思っていたのに……

『世の中の女すべてが輝翔の思っているような女というわけじゃない。その証拠にうちの妹は無条件にかわいい』

現在は仕事のパートナーでもある美月の兄の悠一。あいつと出会った頃、それがやつのお癖だった。ブラコン丸出しの発言を聞くたびに、そりゃ、まだ子供だからだろ、と突っ込んでいたけれど。しかし今、自分は美月にはまっている。……年齢なんか関係なく、美月のことが好きだったと思いが知らされた。

幼い時から両親は仕事で忙しく不在がちで、身の回りの世話は使用人達がしてくれていた。世間一般の家庭のぬくもりはなかったのかもしれないが、別に両親の愛情不足というわけではない。ただ、家族以外の他人と過ごすことが多かったからか、物心つく頃には、自分が周囲からなにを求められていて、どうすれば他人が喜ぶのか心得ていた。

大人の前では子供らしく、子供の前では少し大人びた態度をとれば、皆が口々に『さすが須崎の御曹司』と賞賛する。自分としても、それを不快に感じることはなかった。望むにしろ望まざるにしろ、自分がそういう家に生まれてきたことには変わりないし、むしろ恵まれている方だと思える。もてはやされるのも嫌ではなかったし、須崎の名に恥じない行動をとれる自分にも自信を持っていた。

生まれた時から御曹司であり、須崎グループの後継者。一族およびグループに関わる社員全員の生活を、ゆくゆくは担っていく身だ。だからこそ、進路であれ、結婚であれ、会社にとって意味

のあるものでなければならぬ。いつの間にか俺は、自分で自分の進むべき道を決めつけるようになっていた。

『お前さ、もう少し夢を持ってよ。どこかにきつと、身を焦がすような恋愛ができる相手がいるはずなんだから』

悠一はいつも、少女漫画のヒロインのようなセリフを言っていた。そしてなぜかその後は、決まって妹の自慢話が始まる。

悠一の妹は、あいつに言わせるとかわいい上に少し変わっているそうだ。妹がまだ幼かった頃、悠一が『シンデレラ』の絵本を読み聞かせてやった時のこと。『お前もシンデレラみたいにお姫様になりたいか?』という悠一の問いに、妹は『普通のお嫁さんになりたい』と、きつぱり言ったのだそうだ。

『世の中には、地位や名誉を追い求める女ばかりじゃないぞ』

悠一は俺に、女に対して少しは夢を持って、自分から誰かを好きになる努力をしろと言った。恋を知らない人生なんてつまらない、なんて、本当に少女趣味もいところだ。しかも、地位や名誉になびかない女性として引き合いに出すのが小学生の妹の話って……説得力に欠けている。

『まだ子供すぎて、地位や名誉の価値がわからなかったただけだろう? 成長すれば変わるさ』  
そう言って、悠一をかわしていた。

自分にとつての『普通』と、他者にとつての『普通』は違う。

世の中の女はだいたい皆、俺の外見や社会的地位に惹かれて近寄ってくる。そういう、打算や野

望は、当然の感情と言える。自分も、会社にとってプラスになる相手を選ぶことが正しいと、あの頃は本気で信じていた。

——俺が美月に会ったのは、そんな風に考えていた高校二年の時だった。

気まぐれで訪れた悠一の家。春の陽だまりの中に、華奢わかしよで小さな女の子が立っていた。

ぶかぶかのセーラー服に身を包んだ少女は、満面の笑みで悠一を迎える。次いで、その後ろに立つ俺の姿を見ると赤い顔をして固まった。

『君が美月ちゃん？ 初めまして、悠一君の友人の須崎輝翔です。よろしくね』

差し出した右手に、美月はそっと触れた。それから小さな唇を動かしてハジメマシテと囁ささやるようにつぶやく。

その手は、今まで触ったどんな手よりも小さくて、やわらかかった。

『輝翔は父さんの雇い主の息子で、御曹司おんざうしなんだぞ』

悠一の声に、美月は黒目がちの目を大きくしてパッと顔を上げる。

まずは自分の容姿に見惚みとれて、次に金持ちのお坊ちゃんという肩書きについて『そうなんですか?!』『すごーい!』と賞賛しょうさんの声を上げる。それがいつものことだった。

——どうせ、この子も同じだろう。

シンデレラにはなりたくないと言った少女も、今や中学生。

所詮しよせんは女なんてそんなものだ。

……だが、美月の口から出たのは、俺が思っていた言葉とは違っていた。

『そうですか。今後とも父と兄をよろしくお願いします』

手を離すと、美月はそのまま荷物を抱える。そうして二階にある自分の部屋へと、さっさと引込んでしまった。

静かに閉まったドアを見つめて、しばし呆然ぼつぜんとする。

——いま、彼女の心のシャッターがガラガラと下りたよな？

『な？ 俺の妹は、お前が思ってるような女と違うだろ?』

なぜだか勝ち誇ったような顔をした悠一が、腰に手を当ててふんぞり返る。

確かに、俺に媚こびない女は初めてだ。

まだ中学生になったばかりだし、ただ恥はずかしがっていただけかもしれない。それでも、俺にとっては新鮮だった。

『うん……。好きかもしれない』

純真無垢じゆんしんむくで、春の木漏れ日こものような雰囲気ふんいきの少女。彼女が毅然きぜんとした態度で心の距離をとったことが、強く心に残った。

それからというもの、俺は美月のもとへ足繁あしひらく通った。さらに俺や悠一と同じ高校を受験するという彼女の家庭教師役まで買って出た。

時間を重ねて、少しずつ成長していく美月を見るにつけ、彼女を愛おしく思う気持ちが募もる。

美月は地位や権力といった類たぐいのものに、まるで興味を示さなかった。それどころか、むしろ嫌っているようだった。なにか嫌な思いでもしたことがあるのかと聞いたが、そういうわけでもないら

しい。ただ興味がなくて、自分には関係のないことだと言い切る。

美月はまだ子供だから。大人になれば、俺に対する態度にも変化が表れるかもしれない。いつか美月が変わってしまった時に傷付くのが怖くて、そう言い聞かせていた。

けれど美月の態度は、どんなに親しくなるうとも変わらず……。それは、嬉しくもあり、もどかしくもあった。

いつも頬を赤らめて、潤んだ瞳で見上げていくせに。明らかに好意を持っているはずなのに。

美月は俺に好意を持ちながらも、あくまでも憧れの対象として近寄ってはくれない。そんな美月に、俺はほとんど惹かれていった。

高価なプレゼントも、気取ったセリフもいらさない。

くだらない話をして、一緒に笑える。

俺という人間に会うことだけを、純粹に喜んでくれる。

それが、嬉しくて。

彼女と話している時だけ、俺はただの『須崎輝翔』になれる。

だから俺は、これからもずっと、一番近くで美月のことを見守り続けたいんだ。

「——どうなっても、知りませんからね？」

ようやく呼吸が落ち着いた美月が、腕の中で恨めしそうにつぶやく。

「私みたいな普通の人間が秘書になって、困るのは輝翔さんですからね……」

「大丈夫だよ。美月が傍にいるだけで、俺は頑張れるんだから」

出会ってから十年。恋い焦がれ続けて、やっと手に入れた大切な彼女。

絶対に手放さないといい思いで、美月を抱きしめる腕に力を込めた。

## 第二話

「それは大変なことになったわねえ」

言葉とは裏腹に、お母さんはのんびりとお茶を啜っている。

秘書課への異動が決まってから、初めて迎える土曜日。昨晩は輝翔さんのマンションで過ごしたのだけれど、今日は彼が休日出勤したために、私は実家へと戻った。そして母と、兄の婚約者の沙紀さんに、突然の人事異動について愚痴っていた。

「秘書課ってそんなに大変なところなの？」

お母さんの横で一緒にお茶を飲んでいた沙紀さんが会話に加わる。

大学を卒業してすぐに父の弁護士事務所就職した沙紀さんは、企業勤めの経験がない。ほぼ身内しか働いていないうちの事務所と違って、SUZAKI商事は総合商社。しかも秘書課は才色兼備が集まる花形部署である。年明けからの自分の浮き具合を想像しただけで、溜め息がこぼれた。「秘書課って、専務ファンの巣窟みたいなどころらしいんですね……」



以前、秘書課の仕事のお手伝いに行った時、親切にしてくれた村本さんが教えてくれた。基本的に女性しか働いておらず、年配の重役を相手にすることが多い秘書課。輝翔さんは日常的に接することのできる唯一の『結婚適齢期男子』なのだそうだ。

エリート集団にして女の園。昼ドラ並みにドロドロとした嫉妬と陰謀が渦巻く伏魔殿。そんな環境下で、私が輝翔さんの恋人と知れたら——シンデレラの物語よろしく、意地悪なお姉さま達に苛め倒されるのでは……。本来ならば私の配役なんて、部屋の隅でカボチャをかじるねずみなのにさ。いつそ、隠している輝翔さんとお付き合いをばらしてしまっただ方が楽になるかも、と一瞬思った。けれど専務ファンのお姉さま方を敵に回すのは、やっぱり怖い。

なにより、『専務の彼女』という肩書に守られたくはなかった。仕事の評価は正当なものであってほしい。そうじゃないと、私はいつまでたっても成長できないから。

これから先もずっと輝翔さんの傍にいたいために、頑張らないといけないんだ。

そんな決意表明を母と義姉にしたところ、ふたりともパチパチと拍手してくれた。沙紀さんに至っては感極まって私に抱きついてきたほどだ。

「エライわ、美月ちゃん。この短期間でよくそこまで決心したわね。心配しなくても、美月ちゃんをいじめるような女は、輝翔さんが抹殺するだろうから安心してね」

——いやいやいや。それ怖いって！

「でも、職場に味方がいないのは辛いわね。秘書課で仲良くしてる人っていないの？」

「今のところ、村本さんくらいしか……」

村本さんとは、何度か一緒に仕事をしているので他の秘書課の人達と比べれば親しいのかもしれない。

年上だけれども気さくだし、もし輝翔さんと私の関係を知っても、既婚者で専務を狙っていないから、味方になってくれるかも。

——村本さんの名前を口にしたら、沙紀さんが一瞬だけ眉根を寄せる。しかし私は彼女のその仕事を、あまり気にとめていなかった。

「そうそう、美月は考えることが顔に出やすいから気をつけなさいね。秘密を守ることは、秘書の基本よ」

「お義母さん、秘書業務に詳しいんですね」

「実は、結婚前は私も秘書をしていたのよ」

「えっ!? お母さん、秘書だったの!？」

思わぬところで母の過去を知りました。結婚前にOLをしていたのは聞いてたけど、職種までは聞いてなかったんだよ。

母は、よくも悪くものんびりとした性格だし、秘書としてバリバリ働いていたなんて思いもしなかった。

「そうよ。須崎商事の秘書課で働いていた私に、悠介さんが一目惚れしたのが出会いなの。もっとも、私達をくっつけようと猛プッシュしてきたのは蓉子さんだけだね」

蓉子さん、とは輝翔さんのお母様の名前だ。そもそも、うちと須崎家との関わりは祖父の代まで遡る。おじいちゃん同士が学生時代からの親友だったのが縁で、お父さんと輝翔さんのお母様は幼なじみなのだそうだ。発言力の強い姉と従順な弟——この間、会社で垣間見たふたりの関係は、子供の頃からずっと変わらないものらしい。

「輝翔さんのおじい様は、悠介さんのことを気に入っていて、蓉子さんの結婚相手にと考えていたらしいわ。でも蓉子さんには他に好きな人がいて、悠介さんが私に一目惚れしたのをきっかけにいろいろなことが一気に進んだのよねえ」

昔を懐かしむように、母は遠い目をする。そうして手にしたお茶を飲み干すと、深く息を吐いた。……お父さんがお母さんに甘いのは、惚れた弱みってわけか。

「私は今の自分に満足しているし、流れに身を任せるのも案外楽しいわよ。まあ、そのうち慣れるから」

そう言った母の言葉には、なんだか重みがある。なにが起きても動じないような、度胸が据わった感じだ。

輝翔さんのお母様の力で母と結婚した父と、輝翔さんの協力を得て兄と婚約した義姉。そして、輝翔さんに押し切られて付き合い始めた私。

須崎家、恐るべし。

……私の遺伝子レベルでの負けは、やっぱり確定しているようだ。

「まあ、なるようにしかならないわよ。先のことより、まずは目先の幸せを追求しましょう」

沙紀さんは私に、明るい声で言った。

「なんのことですか……?」

ぽかんとする私に向かって、沙紀さんがかわいらしくウインクなんぞする。

「クリスマスよ、クリスマス。美月ちゃん達の予定はどうなってるの?」

——そう。年末の、大掃除の前にある一大イベント。それがクリスマス。

「輝翔さんのことだから、張り切って準備してるんじゃないの? それこそ、高級ホテルのスイートとか。……いいなあ、憧れるう」

——いや、それはすでに経験済み。

まさか高級ホテルのスイートルームで交際を申し込まれ、そのまま一夜をともしってしまったとは、口が裂けても言えない。

「イヴは平日だし、仕事ですよ。終業後、一緒に食事しますけど」

当日は輝翔さんの部屋で、チキンとケーキを食べる予定になっている。

天下の御曹司と過ごすのに、そりゃないだろうとか言わないで欲しい。輝翔さんからホテルで過ごすという提案もされたが、謹んで辞退させていただいた。

いくら庶民派な私でも、恋人と過ごすクリスマスにまで質素儉約を求めるつもりはない。むしろ、クリスマスとか誕生日とか、特別なイベントの時に高級ホテルのディナーに行くことに憧れていた。……実際にしてみると、気疲れしたけどね。

ともあれ、ふたりにで過ごす最初のクリスマスは、輝翔さんの部屋で過ごしたかった。輝翔さんとお付き合いするようになってわかったのは、彼が私に安らぎを求めているということ。当たり前のことだけど、輝翔さんと私とは当たり前なことには、輝翔さんはすごく喜んでいて、鍋を食べたりという、私にとっては当たり前なことには、輝翔さんはすぐ喜んでいて、煌びやかな世界に慣れていない私の感覚は、その世界に疲れた輝翔さんを癒すものなのかもしれない。……海外旅行から帰ったら、家庭料理が食べたくなる、みたいな？

昨晚、油断すると汚部屋と化す輝翔さんの部屋を片付けて、ホームセンターで買って来た小さめのツリーを飾った。輝翔さんはチカチカと光るツリーに、子供みたいに目を輝かせていた。そんな彼を見て、クリスマスはふたりきりで、アットホームな雰囲気ですごしたいと思ったんだ。「でも、プレゼントに迷っちゃって……」

悩みの種を思い出して、私は小さく溜め息を吐いた。

なにしろ相手は御曹司。いったいなにをプレゼントすればいいのだろうか。大抵のアイテムは持っているし、そのすべてが高そうなブランドものだから、金額的にもハードルは上がっていく方だ。

それに昨夜、ツリーのごとく積み上げられた書類や雑誌の中から最高級宝飾品ブランドのカタログなんぞを見つけてしまった。

——重い。クリスマスプレゼントにしては、高価すぎて重い。

もちろんカタログはゴミと一緒にこっそりと処分しておいた。そんな超高級なものをもらってし

まったら、自分がなにをプレゼントすればいいか、ますます迷う。

「輝翔さんは『美月がいい』って言うに決まってるわよ」

——沙紀さんやめて、母親の前で、やめてえ！

確かに昨夜、輝翔さんに欲しいものを尋ねた時、さらっと私の名前を言われましたけどね？

どうしてそのことを知っているのかと聞いたら、男なんて考えることは皆一緒よ、と沙紀さんは笑っていた。しかも隣の母もうんうんと頷く。父よ、兄よ、そうなのか……？

「気持ちがかもっていけば、なんだっていいのよ。ゆっくり悩んでみたら？」

母の一言で、リビングがほっこりとした雰囲気包まれる。

子供の頃は、クリスマスはサンタさんがプレゼントを運んでくれる日だった。

大人になったらサンタクローズからのプレゼントはなくなったけど、代わりに自分がサンタクローズになれる。

——大好きな人と過ごす、初めてのクリスマス。

クリスマスの話題で盛り上がった私と沙紀さんは、プレゼントを探しに一緒に近くのショッピングモールへと出かけることにした。

セレクトショップからレストラン、映画館などもある大型商業施設は大勢のカップルや家族連れで賑わっていた。どこもかしこもクリスマスカラーで飾られ、流れているBGMも、もちろん定番のクリスマスソング。そんな場所で、素敵でやさしい義姉と一緒にショッピングするのは楽しい。

私にとって、お姉ちゃんと呼べる存在は憧れだった。子供の頃は兄と喧嘩をするたびに『おにちゃんよりも、おねえちゃんのほうがよかった』と言ったものだ。兄も面倒見はいい方だけれど、同性じゃないとできないこともあるしね。

そう、例えば――

「美月ちゃん、これなんかいいんじゃない？」

沙紀さんの手には、目にも鮮やかな赤のブラジャー。

ショッピングモールに着いて、私の手を引きながら沙紀さんが真っ先に向かったのはこの店だった。

他がそうであるように、ランジェリーショップの店内もまた見事にクリスマス一色に飾られている。赤や緑のクリスマスカラーの下着はもちろん、サンタのコスプレ衣装まで。

これじゃあ、『聖なる夜』じゃなくて『性なる夜』じゃないか……

「これを着て『私がプレゼントよ』、なーんて言えば、輝翔さんだって大喜びよ」

やたらと際どい下着を手にして黒い笑みを浮かべる沙紀さんは、どう見てもヘンタ……、イヤ、やめておこう。しかし、どうしてそこまで熱心に薦めてくるのだろうか。

――まさか、輝翔さんか!? あの腹黒王子の差し金なのか!?

疑惑のままざしに気付いた沙紀さんに思わず尋ねたところ、私の考えは即座に否定された。

「そんなわけないじゃない。誰でも知ってる男のロマンよ」

男のロマンについて、どうして女性の方が知っているんですか……!?

誰でも知ってるって、私はそんなの知らないよ!? そんなの、いつどこで習うの!? 保健体育の教科書にもそんなことは載ってなかった!

苦悩する私を見た沙紀さんは、おかしそうに噴き出す。

「私の方が美月ちゃんより男心を理解しているだけ。男とは、単純で妙に未練がましくて、昔の思い出を美化する生き物なのよ」

これは経験だから、と沙紀さんは私の頭を軽く撫でる。ああ、完っ全に子供扱いされました。

確かに私が今まで付き合った人は、輝翔さん以外にひとりだけだ。しかも、三歳しか違わないはずの沙紀さんに比べて大人の女の魅力もなければ色気もない。最近まで輝翔さんに対する自分の気持ちさえ理解していなかったのだから、男心なんてこれっぽっちもわかっていない。

「輝翔さんのハートをがっちり掴んでおくために、美月ちゃんも努力しなくちゃ。というわけで、これ試着してみて」

――なにが、というわけ、なんだ?

よくわからないけれど、試着室に押し込まれながら力説されているうちに、沙紀さんの言うことも一理あるような気がしてきた。

沙紀さんほどの美人であれば、さぞかしモテたことだろう。恋愛経験があるからこそ、今の言葉にも説得力があったのだ。

――それは、輝翔さんにも言えること。

私と付き合う前の輝翔さんについて、以前少しだけ兄から聞いたことがある。

大企業の御曹司で、容姿端麗な輝翔さん。兄が言うには中学生になる少し前くらいから、羨ましいほど多くの誘いを受けてきたのだそうだ。

輝翔さんの過去の女性が気にならないと言ったら嘘になる。ただでさえ輝翔さんの周りには美人が寄ってくるし、その人達に比べて自分が見劣りすることはわかっている。そんな私でもかわいいと言ってくれる輝翔さんを信用してはいないわけではないけれど、いつ私に飽きるとも限らない。

ずっと私を手に入れることに執着していたみたいだけれど、目的が達成された今、繋ぎとめられるかどうかは私次第。

内面を磨くのはもちろんのこと、見た目を磨くことも重要なんじゃないだろうか。

だったら、素で勝負しても勝ち目がない分、たまには自分から武装することも必要なのかもしれない。

結局、普段なら絶対に買わないセクシーなものを選んで購入した。私的にはかなり冒険したつもりなんだけど、沙紀さんは不満そうだ……

もちろんこれでプレゼント選び終了、というわけではない。これはあくまで自分の買い物。実際に着るかどうかはわからないが。

着るあてのないものにしては、少々出費がかさんだけれど……トホホ。

おまけに沙紀さんは人にはセクシーランジェリーを買わせておいて、自分は買わないとか言うし。なんか、遊ばれてるだけのような気がしてきた……

ランジェリーショップを出た私達は、次にメンズ服を取り扱うセレクトショップに立ち寄った。

クリスマス直前とあって、同じようにクリスマスプレゼントを物色しているっぽい女性客が多い。店内を次々と見て回る沙紀さんと分かれ、店内にディスプレイされたマフラーやネクタイといったアイテムをゆつくりと見る。

輝翔さんならたくさん持っているかもしれないけれど、実用的なものであれば数あっても邪魔にはならないかも。それに、お値段も割と手頃だ。気になった有名ブランドのマフラーを手にとろうとしたら、ほぼ同時に同じものに手を伸ばす人がいた。

「すみません！」

私の声と相手の声が重なる。マフラーを掴んでいた手を離して声のした方に目を向けると、それは綺麗な顔立ちの男の人が立っていた。

年齢は私と同じくらいだろうか。黒目がちな瞳が印象的だ。綺麗な顔の男の人は輝翔さんで見慣れているけれど、輝翔さんが美青年という雰囲気なのに対して、この人は美少年という言葉がピッタリ。

赤いチェックのネルシャツにベージュのダッフルコートという服装で、アイドルか若手俳優のような雰囲気である。身長も高いし顔も小さい。本当に芸能人だったりして。

アイドルくん（仮）は人懐っこそうな笑みを浮かべながら手にしたマフラーを差し出した。

「……コレ、買いますか？」

「いや、まだ迷ってるんで、いいですよ」

アイドルくん（仮）の突った顔は、かなりの破壊力があつた。彼にだけライトが当たっているか

のようにキラキラしている。

彼が手にしているマフラーは、シンプルだけど落ち着いたデザインで、輝翔さんみたいな大人の男性に似合いそうなものだと思う。アイドルくん（仮）には少し地味な気もする。

「よかった。彼へのクリスマスプレゼント選びに、迷っちゃって……。これ、おかしくないですよね？」

彼はマフラーを握りしめて、また輝くような笑顔を見せた。

——ちよつと待て。か、彼氏!?

いやいや、そういう世界に偏見へんけんを持ってはいけない。仮にも私は法曹家ほうそうかの娘。人権を侵害するよ  
うな考えを持つてはいない。ただ、生まれて初めて同性愛者の方にお会いしたので、ちよつとびつ  
くりしたただけだ。

「おかしくないですよ。……彼氏さんに似合うといいですね」

彼のお相手は、このマフラーが似合うような男性なのかもしれない。男性同士であつても、好き  
な人を想いながらプレゼントを選ぶ気持ちは私となら変わりはない。同志に向けてエールを送る  
つもりでいると、アイドルくん（仮）は頭を掻いた。

「いや、まだ彼氏というんじゃない……」

そうなのか。じゃあ、これから告白なのかな。

「うまくいくといいですね」

頑張れという気持ちを込めて笑顔でアイドルくん（仮）を見上げると、彼は焦り始めた。

「え……!? あつ! いや、ぼ、僕のじゃないですよ!? 代わりに買って来いつて頼まれただけな  
んです!」

アイドルくん（仮）は、マフラーを振りながら必死に否定する。かなりの大きな声だったものだ  
から、いつの間にか私達は店内の視線を集めてしまっていた。

遠巻きに私達を見る人だかりの背後から、沙紀さんがひょいっと顔を覗のぞかせる。そして、怪訝けげんそ  
うな顔をしながらこちらへと近づいてきた。

「なあに? ナンパ?」

「違いますよ!」

沙紀さんが私の前に立つアイドルくん（仮）を、上から下まで舐なめるようにじつくりと見定める。  
彼は居心地悪そうに、慌あわてて頭を下げた。

「あ……、じゃあ、これ、買わせてもらいます。どうも失礼しました」

すいません、と口にしながら、アイドルくん（仮）は足早にレジに向かっていた。

「かわいい男の人ねえ」

どうやら沙紀さんも、アイドルくん（仮）のイケメンぶりに見惚みとれていただけらしい。沙紀さん  
ほどの美人さんにじろじろと眺ながめられれば、そりゃ、緊張するわな。

会計をするアイドルくん（仮）の後姿をしばし見つめる。彼はプレゼント用にラッピングされ  
たマフラーを受け取り、ふたたび振り返るとこちらに会釈えしやくして笑顔で去っていった。

「本当に、綺麗な男の人でしたね」

人ごみに消えていく背中を見送りながらなんの気なしにつぶやくと、沙紀さんの口元が意地悪く歪んだ。

「……輝翔さんに言っただろ」

「うわあああん、沙紀さあああん！」

マフラーはアイドルくん（仮）に譲ったけれど、私もこの店で無事、輝翔さんへのクリスマスプレゼントを見つけて購入できた。これで、プレゼントの準備はOK！ そんな風に初めてのクリスマスに浮かれていた中、嵐は突然やって来た――

その日、すべての仕事が終わったのは二十二時を少し回った頃だった。

日中にちよっとしたトラブルがあり、ようやく残業を終えた私は、エントランスに立つ警備員さんに挨拶をして会社を出た。

遅くなる日は輝翔さんが家まで送ってくれることもあるけれど、その日は彼からのメールも来ていなかった。年末に向けて、いよいよ輝翔さんも忙しくなってきたのだろう。終電にはまだ余裕があるし、夕飯はコンビニで買って帰ろう。そんなことを考えながら、ちょうど会社前の歩道に出た時だった。

「あなた、羽田野美月さん？」

声のした方を見ると、道路脇に停まった黒い高級外車の横に、真っ白なロングコート姿の背の高

い女性が立っていた。

冬の夜道に光る真っ白なコートは、まるで雪のよう。毛皮ではないみたいだけど、かなり高級そうだ。

肩の下まで伸びた髪は、緩いウェーブがかかっている。真っ白いコートとは対照的に口紅の色は鮮やかな赤。夜でも映えるほどの赤って、どれだけ派手やねん。おまけに、夜なのにサングラスをつけて……

退社時間をとくに過ぎていたので人影はまばらだが、仁王立ちしている彼女を道行く人はちらちらと横目で見ている。

だけど彼女は平然と、まっすぐ私を見つめて、いや、睨みつけていた。

できることなら関わりたくはない。でも、ここで人違いですと言って逃げても、この手の女性はきつとまた会いに来るだろう。

はつきり言っただけのトラブルの予感しかしらないが、私は観念して彼女に近付いた。

「……そうですけど、どちら様でしょうか？」

近くで見るとなかなかの美人だ。……化粧は濃いけどね。それに、香水も付け過ぎなんじゃない？ 彼女に一步近付くたびに、むせ返るようなバラの匂いが鼻をついた。

彼女は私の問いかけには答えず、人差し指でサングラスを下にずらすと、私の身体を上から下までじろじろと見る。そうして、鼻で笑いやがった。

「なんだ。大したことないわね」

「——は？」

なんで突然現れたこの人に、悪口を言われねばならんのだ。一瞬、呆気にとられたが、たいして間を置くことなくイライラが募る。

それなのに人を不快にさせたこの人は、もうすでに私からは興味を失くした様子でそっぽを向くと、目の前にある会社の上の方——おそらく、重役室のある階を見つめていた。

「須崎社長が直々に選んだと聞いたから、どんな美人かと思ったらこの程度。これなら時間の問題ね」

彼女が車内に向かって台図した直後、運転席からスーツ姿の中年男性が飛び出してきた。

運転手らしきおじさんがうやうやしくドアを開けると、彼女はさっさと車内へと身を滑り込ませる。

「ちよ、ちよっと……！」

勝手に人を呼び止めておいて、名乗りもせず立ち去るなんて！

思わず声をかけた私を一瞥すると、ドアが閉まる間に、彼女は捨て台詞を吐いた。

「輝翔は私のものよ。そのうち返してもらおうから」

遠ざかる車を見つめながら、今日一日溜まりに溜まったストレスが爆発した。

一日頑張つて働いた最後の締めがこれなんて、本当に今日はなんて日だ。

抑えきれないイライラで、車の走り去った方向に向かって、つい声を上げる。

「真っ白なコートを着込んで——お前は、雪の女王かっ！」

### 第三話

迎えたクリスマススイヴ。仕事を終わらせた私は、一足先に輝翔さんのマンションへと向かおうと、駅前を歩いていった。

いくら繁忙期とはいえ、イヴにまで残業を強いる程、うちの会社は野暮ではないらしい。家族持ちもおひとりさまも今日は皆、早めに切り上げていた。

——ただし、輝翔さんを除いて。

輝翔さんも早く帰れるように工面していた様子だったが、急な面会の申し入れがあったとかで帰りが遅れると連絡があった。

輝翔さんは申し訳なさそうにしていたものの、私としては準備に専念できるのでありがたくもあるのだけれど。

だって、輝翔さんがいても、お手伝いにはならない。お坊ちゃま育ちの輝翔さんに家事能力は皆無である。その上、人がキッチンに立っているとじゃれついてくるので、料理の手を止めることもしばしば。キッチンに立っているのを見ると萌えるって、どういうことだろう……。あ、いかん。余計なことまで思い出してしまった。

駅前の店で予約していたチキンとケーキを受け取って通りに出ると、もうすでにカップルで賑



わっていた。人だかりの中心には、大広場に飾られた大きなクリスマスツリー。LEDに彩られたそれは暗い夜空にキラキラと輝いている。私もしばし足を止めて眺めてみた。

隣に輝翔さんがいないことは少し残念。でも、大きな荷物を手にして彼の家へと向かう自分を、なんだかとても幸せに感じる。

最近忙しくてなかなか会えなかった分、今日はふたりきりでのんびり過ごそう。早く帰って準備をしなきゃと駅に向かって歩き出そうとする。そしたら、ふと見覚えのあるベージュのダッフルコートが目に入った。

あの端正な横顔は、間違いない。この間、ショッピングモールで出会ったアイドルくん（仮）だ。ツリーの傍らに立つ彼は、まるで雑誌から抜け出てきたモデルのようで結構目立っている。カッブルの女子がさつきからチラチラと横目で見ているものだから、隣の彼氏達は気になって仕方ないようだ。

彼はコートのポケットに手をつ突っ込み、ひとりでクリスマスツリーを見上げていた。その首元には、あの時買ったマフラーが巻かれている。

あれ、ということだろうか？ あの時、彼は誰かの代理でプレゼントを買いに来たって言ったけど……

ツリーを見上げる表情がなんとなく切なげにも見えたけど、声をかけるほど親しいわけではないのでやめた。彼が素敵なイヴを過ごせますようにと心の中で願うだけに止めて、その場を後にした。

輝翔さんの部屋に着くと、急いで準備を開始した。輝翔さんの好きな魚介のたっぷり入ったクラムチャウダーを作る。ちょうど料理ができあがる頃、輝翔さんからもうすぐ帰るといふメールが届いた。鍋の火を消して、買ってきたチキンをお皿に盛ると、窓辺に飾ったクリスマスツリーのスイッチを入れた。

輝翔さんの部屋は須崎グループが所有するマンションの最上階にある。ここ何ヶ月かの間に数回足を運んだけど、ひとりで待つのとは今日が初めて。早い段階で合鍵を預かってはいたものの、勝手に上がり込むのは気が引けた。それに、やっぱり、狭くても自分のアパートの方が落ち着くんだよね。

大きな窓の外に広がる夜景は、小さなツリーの電飾が霞んでしまうくらい綺麗だ。宝石みたいに輝くビルの灯りや階下を通る車のライトを見下ろすのは、なんか、成功者、って感じ……

——でもね？

窓に映るエプロン姿の自分は、部屋の豪華さとは恐ろしくミスマッチだった。

これじゃ住民というよりハウスキーパーだ。優雅なドレス姿だったりしたら様になるんだろうけど。

「雪の女王じゃあるまいし……」

ふと、先日現れた謎の女王様を思い出す。

彼女とはあれ以来会っていない。間違はなく輝翔さんの知り合いなのだろうけど、あの時の出来事を含めて、輝翔さんにはなにも話はしていない。

あれがいわゆる『社交界の女』なのだろうか。兄の話によると、輝翔さんはそういう世界の女性達との縁は長く絶っているみたいだ。けれど、私のことを聞きつけてわざわざ会いに来る人がいるくらいだから、まったく関わりがないわけではないらしい。

しかし、以前現れたお嬢様といい、どうして皆、輝翔さんをくれとか私のものとか言うんだろうね。輝翔さんは人であって物じゃないんだから、『くださいな』『はいどうぞ』なんて、できるわけがないのに。

もし仮に、私がそういう女性の攻撃に屈して、理由を告げず輝翔さんに別れを申し出たとする。それでもあの腹黒王子が素直に受け入れてくれるはずもないと思うのは、私の自惚れだろうか。どうせ理由を追及されまくり、論破され、うまいこと丸め込まれて、却下されるのが目に見えている。もしも別れる時が来るのであれば、それは十中八九、輝翔さんの方から。だから飽きて捨てられないように、私も努力しないとイケないわけ——

「……美月？」

「うわあああっ！」

背後から急に声をかけられて、思わず色気のない叫び声をあげてしまった。振り返るとリビングに続く扉を開けた輝翔さんの姿が。

——い、いつの間に!?

「怖い顔して、なにを考えたの？」

「いえ、別に……」

「そう？ 遅くなったから怒ってるのかと思った」

「お、怒ってませんよ……、てか、なんですか、その荷物？」

リビングに入った輝翔さんは、両手にたくさんカラフルな紙袋を携えていた。それらをソファ近くの床に下ろすと、中から赤と緑の包装紙に包まれた箱を取り出して見せる。

「付き合いのあるところからのクリスマスプレゼント。いらないうって断ってるんだけど、しつこくてね」

そう言って苦笑いを浮かべ、取り出したプレゼントをまた紙袋の中へと戻す。

「付き合いのあるところって、会社関係ですか？」

紙袋のロゴは、どれも有名な老舗デパートやブランドものばかりだった。会社同士のお付き合いであればプレゼントも高額にはなるのだからけれど、私のプレゼントよりもいいものだったら……、なんか嫌だな。

いや、大切なのは値段よりも気持ちだとは思っただろう？ プライスレスだから。でも、気持ちは目に見えないから。

「もしかして、妬いてる？」

窓辺に近付いてきた輝翔さんは、なんだか嬉しそうにニヤニヤしている。なんかまた、変なスイッチ入っちゃったかも。最近やたらとスイッチ緩くない？ このまま彼が暴走し始めたら非常にまずい。ここは早めに、今の妙な流れを食い止めなければ。

「別に——」

妬やいてませんよ、と続けるつもりが、言い終わる前に抱きしめられていた。

外から帰ったばかりの輝翔さんのスーツは冷たくて、自分の体温との温度差がよくわかる。そつと触れるだけのキスをして、輝翔さんはニッコリと微笑ほほえんだ。

「遅くなってごめん。ただいま」

冷えた唇の感触とは対照的に、頬が熱くなっていく。

「……オカエリナサイ」

なんだ、この会話は。まるで新婚夫婦みたいじゃない……

「やっぱりエプロン姿は萌もえるなあ」

「ひゃあっ！」

私を抱きしめる輝翔さんの手に力が入る。腰に回された手がお尻おしりを撫なでた。ヤバイ、このままではエロエロモードに突入してしまう!?

「ダメですよ!? ごはんを温め直すから、先にお風呂に入ってください!」

「えー? 美月も一緒に入るうよ」

「明日も仕事なんですから、グズグズしてたらイヴが終わっちゃうじゃないですか!」

彼の提案は無視した。せっかく準備したんだから、ちゃんとふたりでクリスマスしたい。輝翔さんの腕を振りほどこうとすると、それは案外簡単に外れた。

「そうだね。時間が惜おしいから言う通りにする」

離れていく輝翔さんから、微わずかにだけけれど、いつもと違う香水パラの匂においがした——

クリスマスディナーは、それはそれは和わやかにいただきましたよ。

リビングの電気は消して、ツリーの光とキャンドルの灯あかりの中、何歳までサンタを信じていたとか、どんなプレゼントをもらったとか、それぞれの思い出話をしながら楽しんだ。

輝翔さんはセレブだから、小さい頃から豪華なプレゼントをされてたのかと思ってたけど、そこは子供らしく流行はやっていたおもちゃとかゲーム機とかをもらっていたんだって。多忙たひんなご両親もクリスマスは特別に早く家に帰って家族三人で一緒に過ごしてくれたそうだ。さすがにお料理の準備は間に合わないから、シェフの準備したものを食べていたらしいけど。

そんな話を聞いたものだから、自分が作った質素なメニューに恐縮おそくしてしまった。けれど輝翔さんは、手料理なのが嬉しいと喜んで食べてくれた。

「……で、食事も終わって片付けも済ませたので、私もお風呂に入ったわけですが。」

「さて、どうしたものか……」

脱衣所にてバスタオルを身体に巻きつけた状態で、私は葛藤かつとうしていた。

手にしているのはもちろん、沙紀さんと一緒に買ったあのセクシーランジェリーだ。

「うう、恥はずかしい……」

意を決して身につけてはみたものの、やっぱり私にはハードルが高すぎたかもしれない。

沙紀さんに言わせれば『パンチが足りない』赤のベビードールスリップとショーツ。原色バリバリの派手な下着に囲まれていたせいで、シックなワインレッドが落ち着いて見え、つい勢いで購入

した。でも、冷静になってみればこれもやっぱりヤル気満々だよね。

というより、色とかの問題じゃなくて、いつもとは違うセクシーランジェリーを着ようとする時点でヤル気満々なんだけど。

サテン生地のスリッパは、ある程度の丈があるお陰でギリギリでショーツは隠れている。胸元から脇の部分にレースの刺繍が施されているのでバストトップは、かろうじて見えない。ただ、日頃はパットのしつかり入った寄せ上げブラをしているから、着ている感覚に違和感がある。おまけにショーツは紐バンド。

いくらなんでも輝翔さんだって引いちゃうかも……

クリスマスの夜だからと言って、そういうコトをするとは限らない。逆に、クリスマスじゃなくても、する時はするんだけどね。だから、こんなに張り切らなくてもよかつたんじゃないかな。

でも、ただでさえ色気が足りないんだから、これくらいの努力をしないと飽きられるのも早いかもしれない。特別な日だからこそ、普段とは違う自分を演出できる理由付けにもなるしね。

……まあ、しない時は見られることもないから、気にしなくてもいいか。

そう自分に言い聞かせて、強引に勇気を振り絞ったのは、やっぱりさっきのことがあるから。すん、と鳴らしてみた鼻の奥には、まだバラの香りが残っているようだった。

さっきはあ言ったけど、たくさん抱えて帰ってきたプレゼントに、やっぱり嫉妬しているのかもしれない。

輝翔さんは付き合いのあるところから、としか言わなかった。でも、それがすべてお仕事に関わ

るものではないということは、あの匂いでわかった。

それに、たとえ輝翔さんが仕事や家同士の付き合いとしか思っていないなくても、相手も同じ考えだとは限らない。少なくとも、輝翔さんが無下に断れないくらいの人があればいいということだ。中には彼に対して、恋愛感情を抱いている人がいても不思議じゃない。だから、なおさら……

意を決した私は、脱衣所の扉に手をかけた……けど、このまま出ていくのは、さすがに無理。スリッパの上にパジャマを着るのは味気ないので、用意しておいたニットの膝丈ワンピースを被ってみた。Vネックだし、白だし、ベタだけど男受けもいいという沙紀さんの入れ知恵だけど。もしもこのまま寝るのなら、下にショーツ・パンツでも穿けばいいし。

見せたいのか見せたくないのか、どっちなんだ私……

あれこれ考えていたから結構な時間が経ってしまった。慌ててリビングに戻ると、スウェット姿の輝翔さんは今日の戦利品をテーブルの上に並べていた。

「遅かったね。早くこっち来て」

輝翔さんはソファに座ったまま手招きしている。どうやらプレゼントの中身と一緒に見ようとしているようだ。

そりゃあ、いただいたものを確認もしないで置いておくのはどうかと思うよ？ でも、いくらやましい気持ちがないからと言って、よそ様からのいただき物を彼女の前で見なくてもいいじゃないか。

それに、私のプレゼントだってまだ渡していない。先に高額な品物を見せられたら、居たたまれ

ない。

無然<sup>ぶぜん</sup>としながらも隣に腰を下ろすと、輝翔さんはテーブルの上のプレゼントをずいっと私の前へと動かした。

「これ、俺からのプレゼント」

「——はい？」

目を丸くする私に、輝翔さんは少し照れたような笑顔を見せる。そして、大きさも形もさまざまなプレゼントの中のひとつを手にとると、私の手のひらに載せた。

「今日は美月と過ごす初めてのクリスマスだけど、知り合っただけは随分<sup>ずいぶん</sup>昔だから。今まで一緒に過ごせなかった分のプレゼントを用意してみた」

これ、全部、私の……!?

それにしても、多すぎる。いったい総額いくらになるのさ!?

「私、高価なものはいらないって言いましたよね？」

「うん。だからひとつひとつの値段は抑えておいた。本当は全部まとめて指輪にでもしようかと思っただけで、今回は質より量で」

テーブルの上のプレゼントは、ちょうど十個あった。

ひとつひとつは安価でも、まとめてしまえば高価になるんじゃないの？

一緒に過ごせなかった、十年分のプレゼント。物の数で気持ちを測るわけではないけれど、この箱のひとつひとつに、輝翔さんの私に対する想いが詰まっているような気がした。

出会ってから十年。十年もの長い間、変わらずに私を想い続けてくれたことを改めて実感して、胸が熱くなった。

私の二十三回目の誕生日をお祝いしてくれたあの日——輝翔さんが思い切った行動を取ってくれなかったら、私は今でも自分の気持ちに蓋<sup>ふた</sup>をしていただろう。

それが今、当たり前のように輝翔さんの隣にいて、一緒に時間を過ごしている。本当に夢のようなだ。いや、奇跡だ。

輝翔さんはこんなに私を喜ばせてくれるけれど、私はどうだろう……自分の準備したプレゼントがあまりにもみすぼらしく感じて、急に申し訳ない気持ちになった。

プレゼントの値段や数もさることながら、向けられている愛情に十分<sup>じゅうぶん</sup>応えられていないような気がする。

「ごめんなさい。私、ひとつしか用意してなくて……」

しかもまだ渡してもいない。慌てて取りに行こうとすると、輝翔さんの腕に捕まった。輝翔さんは私の首元に顔を埋めながら、小さくささやく。

「いいよ。美月がいてくれることが、一番のプレゼントなんだから」

私がいることが、プレゼント……。私が……。プレゼント……

ああ、どうしてこんないいムードの時に、沙紀さんの言葉が頭に浮かぶの!? 言えない、そんな恥ずかしいこと、言えるわけがないのに!

「……で、美月? どうしてこんな格好してるわけ?」

甘い声からは一転、いつものどうして攻撃が始まる。

輝翔さんの片手は私の首に回されているけれど、もう一方の手は、ニットワンピースの胸元を摘んで広げていた。

——み、見られた!?

「たまたま見えたんだけど、見せるつもりで着たんなら、そのままお風呂から出て来ればよかったのに」

私が呆然としていているうちに、輝翔さんはニットの裾を掴むとそのまま引き上げ、脱がしてしまっただ。

露わになった、スリップ姿の私……

「うわ。エロ……」

やっぱり、引いてる!? なんとか取り繕おうとしたものの、焦った私の頭に浮かんだのは、例の言葉だけだった。

「えっと、あの、その、……わ、私が、プレゼントよ、みたい、な?」

うわあああん、言ってもうたあああ!

絶対に言えないと思っていたのに、まさか自分の口からそんな言葉が出るなんて。まんまと沙紀さんの術中にはまってしまった。さすがの輝翔さんも呆れてしまったかもしれない。

身体を縮めてチラリと見上げた先で、輝翔さんは目を丸くしたまま固まっていた。でもそれは一瞬のことで、すぐに目を細め……わ、笑った!?

「……ありがと、美月」

輝翔さんの笑みの向こうに黒いものが見えて、背筋がゾゾツとした。

ああ、なんか、やっちゃった気がする……

「せっかくだから、もつとよく見せて?」

両脇の下に手を入れられて子供みたいに持ち上げられ、ソファに座る輝翔さんの向かいに立たされた。

「あ、あんまり、見ないで、ください……」

下着姿どころか、その下の素肌や自分でも見たことのない場所まで、もう何度も見られているというのに、どうしても慣れない。輝翔さんの視線を感じるだけで肌が粟立ち、体温が上がっていく。羞恥に耐えられずに懇願すると、輝翔さんは意地の悪い笑みをたたえながら私を見上げた。

「どうして? 美月自身がプレゼントなんですよ?」

ツリーの灯りに浮かび上がる輝翔さんの顔は、ゾツとするほど艶やかで色っぽかった。

輝翔さんに見つめられるのに私が慣れることは、恐らくこの先もないだろう。それだけ私にとって、輝翔さんは特別な存在だ。

かろうじて太腿までの長さがあるスリップの裾を精一杯伸ばし、なんとか身体を隠そうとしてみると、輝翔さんは少しだけ困った顔をする。

「その顔、ヤバいね」

「はっ?」

「真つ赤な顔して俯きながら耐えてるとか、たまらない」

そう言つて、輝翔さんの指がスリップの生地を滑りながら膨らみをゆっくりとなぞる。円を描くように一周して頂の先に触れられると、身体がピクリと跳ねた。

指は胸から離れると下へとおりていく。そして、ウエストのくびれや腰骨をなぞり、ショーツを留めている細い紐の上へ辿り着いた。そのまま紐を解かれるのかと思つて身構えたけれど、指はそこを通り過ぎて太腿の外側を撫で、今度は内側へと場所を移す。恥丘の中心を這う指にまたも身体を震わせるが、やはり一瞬触れただけで通り過ぎてしまった。

次いで腹部を這つた指は谷間を潜り抜け、鎖骨の上を肩側へと移動する。それから首筋を通り頬や顎をかすめ、さらに反対側のラインも同じように辿つていく。私の吐く息は、徐々に甘いものへと変わつていった。

指で身体をなぞりながらも、輝翔さんの視線はまつすぐに私の顔へと向けられている。輝翔さんは、本当に私のすべてを確認しているようだ。

全身くまなく指を這わせると、今度は両手でスリップの上から膨らみに触れ、包み込むようにやわやわと揉み上げていく。

「はあっ……あっ……や、っ……」

クリスマスツリーの灯りに照らされたリビングに、吐息混じりの声が響く。

ソファに腰かけている輝翔さんの目の前にある自分の胸が、彼の手によって次々と形を変える。そんな光景に羞恥心を煽られて、下腹部が疼いた。

「あ……、輝翔さん……」

おずおずと名前を呼びながら、輝翔さんの頭へと手を伸ばした。指に触れたふわふわとした髪の毛が気持ちいい。髪の間指を埋めると、私の胸元で輝翔さんが小さく笑つた。

どうしたことかと首を傾げ、輝翔さんを見下ろす。そこで、彼が笑つた理由がなんとなく理解できた。どうやら、輝翔さんの頭を抱いたことで、自分から胸を押し付けるような格好になつてしまったようだ。

「どうしたの？ いやに積極的だね」

輝翔さんは間髪容れずに追い打ちをかける。

咄嗟に離れようとすると、膨らみを愛でていた指が先端を弾いた。

「ああんっ」

反射的に、輝翔さんの頭を抱く手に力が入る。触れられていなかったのに、頂はスリップの上からでもわかるくらいに硬く尖つていた。そのまま指で摘んで擦られると、なんとも言えない痺れが全身に広がっていく。

「だーめ、逃げないで。せつかく美月の方から迫つてくれてるんだから」

セマツテナイ、セマツテナイヨー。

セクシーランジェリーはともかく、この状況に持ち込んだのはあんたじゃないか！

こんな格好をして、こんなに反応をしていながら、今さら止めてくれたなんて言わない。だけどさすがに、いつまでも輝翔さんの前に立つたままというのは、恥ずかしい。

「あ、輝翔さん……、ここじゃ、やだ……っ」

せめて、ベッドに行きたい。彼の肩を掴んで身体を離そうとすると、ガツチリとホールドされてしまう。それから、滑らかな指で背筋をツツ、となぞられて背中がしなった。

「ひゃあっ……ん」

ガクンと膝から崩れ落ちてしまった。

傾いた身体は、輝翔さんの手によってしっかりと受け止められる。

「寝室に行ったら、せつかくのツリーが見えなくなるだろう？」

輝翔さんは自分の両足を、私の足の間に滑り込ませた。そして、またも両脇に手を入れて私の身体を持ち上げる。すると今度は、ソファに座る輝翔さんの膝の上に、向かい合う体勢で座らされた。「せつかくのイヴなんだから、今日はこのままここで、ゆっくりと見させて？」

そう言っつて、ニッコリと微笑む。えっと……あなたが見たいのは、クリスマスツリーじゃない……ですよ？

手で払われるだけでスリップの紐は簡単に肩から滑り、腰の辺りまでストンと落ちた。肌が外気にさらされ、震える。すると輝翔さんは、すかさず先端へと吸い付く。

「は……あ……」

熱く濡れた舌が乳首を捏ねる。左右にねつとりと転がしたかと思えば、舌先を硬くしてつついたりして弄ぶ。眩暈がしそうなほどの快感。輝翔さんの頭に、必死でしがみついて耐えた。

輝翔さんの口から漏れる熱い息や唾液の音に、身体がいちいち反応してしまう。輝翔さんのやわ

らかい髪やシャンプーの匂いが心地いい。穏やかな波のように繰り返される愛撫に、ずぶずぶと濡れてしまう。

唇と舌を動かしながらも、彼の手はしっかりと私の背中を支えてくれている。

意地悪で強引で策士だけど、心底やさしい王子様。彼とのあたたかな触れ合いに酔っていると、私を支えているのとは反対の手が、シヨーツの上から秘部に触れた。

「ひゃあ……っ」

身体がビクンと跳ねる。サテン素材のシヨーツがクチュリと音を立て、そこがもう十分に潤っているのがわかった。

「こんな濡れてたら、下着をつけてるの気持ち悪いでしょ」

輝翔さんはそう言い、クロッチの脇から指を潜り込ませる。

「はあ、……あ、ああ……っ、んっ……」

差し込まれた中指が内壁の浅い場所を擦る。そのまま、輝翔さんの指はなぜか浅いところに留まっていた。

「下着をつけたままだと、あんまり奥まで届かないみたい。でも、せつかく美月が俺のために選んでくれたものだから、脱がしたくないんだけど」

指を前後に動かされるたびに、痛みにも似た快感が生まれる。もどかしさから腰を揺らすと、突然電気のような衝撃が走った。

「んああっ」



秘部の上にある敏感な場所に刺激が加わったのだ。

でも、輝翔さんの親指はただ蕾に触れているだけで、微動だにしない。どうやら自分で腰を揺らした拍子に、感じる部分を押し付けてしまったようだ。

瞬間、輝翔さんの口の端がニヤリと上がる。どうやら王子様は、新たな悪事を思いついたらしい。「自分で動いて」

悪魔のような一言に、耳を疑った。

「む、無理っ、できない……っ」

身を引いて逃げようとしたが、背中の手で制される。そうして輝翔さんは、押し当てた指をゆくりと動かした。撫でるだけの軽い刺激にも甘い吐息が漏れてしまう。

「はあ、ん、……あ、や……あ」

「ほら、美月。こうやって……動いて？」

私が戸惑っている間にも、輝翔さんの指は感じる場所を何度もかすめる。なんとも言えない焦れつたい感覚が全身を支配する。

嫌なのに、恥ずかしいのに。意に反して、身体は更なる刺激を求める。必死で理性を保たないと、自分から動いてしまいそうだ。

「大丈夫だから。美月が感じてるところ、俺に見せて……？」

麻痺した頭に、輝翔さんの声がやさしく響いた。腰に回された手に促される。

ゆるゆると腰を動かすと、擦りつけた場所から痺れるような快感が広がった。

「ああ、はあ、あ……ん、んんっ……」

数回動いただけなのに、身体中から汗が噴き出す。これは私の意思じゃない、と心の中で言い訳しながらも、腰の動きを止められない。水音が段々と大きくなっていくのが自分でもわかった。

「気持ちいい？ ねえ、美月、すごくいやらしいよ。自分で動いて気持ちよくなってるって、わかってる？」

「や、言わないでえ……っ」

自分が淫らな行為をしていると思いき知らされて、羞恥心から逃げ出したくなった。だけど、もう抗えない。

私は、この先にある快感を知っているから。

「輝翔さん……、お願い……」

一度崩れた理性は、羞恥心をも忘れさせる。輝翔さんの身体に継り付きながら懇願すると、彼はちよつとだけ辛そうな顔をして、溜め息を吐いた。

「直に触ってあげたいのはやまやまなんだけど、両手が塞がってるんだよね……」

そう言っつて、輝翔さんはまたも意地悪く笑った。

——だったら、背中を支えなくていいように、横にならせてよ。

ソファに横たえてくれれば済むのに、輝翔さんにその気はまったくくないらしい。

この期に及んで、まだ苛めるか。涙目で睨むと、輝翔さんはよいアイデアが浮かんだかのような表情になる。……恐らく、演技だ。

「そうだ。俺の両手は塞がってるから、美月が自分で下着を外したら？」  
その一言に、ふたたび耳を疑った。

——な、なんですと!?

「紐バンの紐、美月が自分で解けばいいんだよ。ね？」

もう十分恥ずかしい思いをしたのに、その上まだ、自分から服を脱げと言うのですか!?

脱がされると自分から脱ぐのではわけが違う。触って欲しいとは思ったけれど、がつついてい  
ると思われたくない。輝翔さんの上で腰を揺らして自分からショーツの紐を外すだなんて、それこ  
そ、ヤル気満々じゃないか。

「ほら、早く」

「ああんっ！」

敏感な場所を爪で引っ掻かれ、身体が跳ねた。

……多分、言う通りにするまでこの状況は続くのだろう。観念して、片方の紐に手を伸ばす。せ  
めて紐を外すところを見られないようにと身体を密着させようとする。けれど輝翔さんはそんな時  
に限って私の身体からグイと離れた。

くそう、この色欲王子め。

勢いで一気に引き抜くべきか、少しずつゆっくりにするべきか。ほんの少しだけ躊躇した後、握  
りしめた紐を思い切って引っ張った。

秘部を覆い隠していた布が、はらりと剥がれて片足に引っかかる。輝翔さんがどんな顔をしてい

たのかはわからないけれど、ひゅつと息を呑む音は聞こえた。

「かわいい、美月。最高のプレゼントだ」

「ああああ……っ！」

途端に、指が奥深くまで突き立てられる。じゅつと溢れ出した蜜が、輝翔さんの手を流れ落ちて  
いく。

「やつ……、イ、く……いつちゃう、輝翔さ……んっ！」

輝翔さんの指は、私の一番感じる最奥に辿り着いて攻め立てる。同時に敏感な蕾を強く押し込ま  
れ、くすぶり続けた身体は一気に昇り詰めてしまった。

だらりと倒れ込んだ私を輝翔さんは抱きしめ、頬にやさしくキスした。朦朧とする頭で、そうい  
えば今日は、まだ深いキスをしていなかったということに気付く。けれど、そんなことすらどうで  
もいいように思えた。

私は、ようやくソファへと下ろされた。

重い身体をずるずると傾けて横になり、目を閉じる。暗闇の向こうで、なにかを取り出して破く  
音がしている。

輝翔さんの準備が整うのを待つ、この時間が嫌だ。まな板の上の鯉、状態のこの時間が——  
準備を終えた輝翔さんは私の腕を掴んで引き起こし、またも私を自分の膝へと座らせた。しかも、  
腰に引っかかったままのスリッパはおろか、片側だけ外れたショーツもそのまま……